

一 兵要地理資料集録（渡邊正氏資料）について

金窪敏知

兵要地理資料集録（渡邊正氏資料）とは、旧陸軍参謀本部の参謀で元陸軍少佐の渡邊正氏が保存されている終戦前後の記録文書であり、内容は次の通りである。

- (一) 大東亜戦争末期に本土決戦に備えて計画実施された兵要地理調査研究会に関する資料
- (二) 終戦時における地図等の焼却処理に関する資料
- (三) 陸地測量部組織の処理と内務省地理調査所の設立に関する資料
- (四) 戦後進駐軍との折衝に関する資料
- (五) 兵要地誌に関する資料
- (六) その他（参考資料等）

右のうち、その他の資料には各種の地図が含まれる。文書の形式は、ガリ版、タイプ印刷、活版刷、ペン書、鉛筆書などさまざまで、公文書のコピーや下書きもあり、総数約七十点に及ぶ。進駐軍との折衝に関する資料には英文が含まれている。

渡邊正氏は昭和十九（一九四四）年五月から昭和二十（一九四五）年十月終戦による復員まで、参謀本部陸軍参謀、大本営参謀陸軍少佐として、

情報担当の第二部に所属した。当初は第七課（支那情報関係）、次いで第六課（采英情報関係）において勤務し、更に第四班に移って、情報に関する総合情勢判断、兵要地誌、および陸地測量部の管轄を担当した。氏の在任中の業績として挙げられるのは、第一に、前記（一）の兵要地理調査研究会の発案および実質的運営に携わり、陸軍と地理学者との交流、連携の基礎を作り上げたこと、第二に、終戦直後に陸地測量部を陸軍から急遽内務省に移管し、「地理調査所」として改組再発足させることを発案し、上司に対する意見具申ならびに関係部局との折衝に積極的に携わり、極めて短期間にこれを実現させたことである。

外邦図研究会による追跡調査で明らかにされたように、陸地測量部が中心になって作成された外邦図は、戦後になって主として資源科学研究所、東京帝国大学、東北帝国大学（何れも当時）などに搬出頒布された。昭和二十（一九四五）年九月当時、参謀本部にあって地図類に関する残務整理に従事していたのが渡邊参謀であり、外邦図搬出先の研究所や各大学の地理学者は何れも兵要地理調査研究会に委員として参画していた。参謀本部からの地図搬出が円滑に行われたのは、このような参謀本部と地理学者との緊密な人的交流、特に兵要地理調査研究会の存在があった故と理解される。

前記のように、渡邊氏資料は多岐に亙るが、必ずしも系統立てて整理されたものではない。終戦時の混乱の中にあつて、それまで蓄積された情報収集の記録および成果の散逸を恐れた渡邊参謀が、密かに個人的に保管されていた資料であり、今日漸く公開に踏切られたものである。従つて、内容的に外邦図と直接関係するものではないが、外邦図の研究者

にとつては背景事情を知る上で極めて貴重な第一級資料と言える。この
ようなことから、渡邊氏資料のうち、特に外邦図研究者の参考になるで
あろうと考えられる資料を、約二十点選別し、解説を付して作成したの
がこの資料集である。編集に携わった一員として、この資料集が意義深
く活用されることを望みたい。